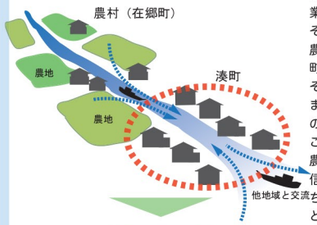
河が育む農縁

河を介して農作物が運ばれ、人々の豊かな営みと交流があった
河を介して農で繋がっていた、その繋がりをもう一度考え直す

～「農」を活かした都市と農村の共発型まちづくり～

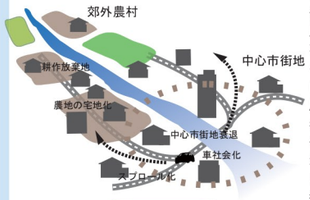
■提案趣旨

湊町新潟の捉え
河を介して農作物が運ばれ栄えた湊町



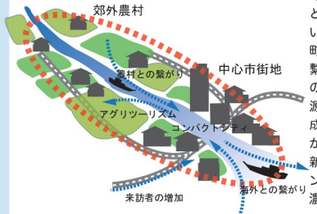
かつての新潟は、信濃川沿いの豊かな水を利用した農業が発展し、川沿いに在郷町などの村が現れはじめた。そして、川沿いの農業地帯で作られた米を中心とした農作物が舟運によって河口部分に集められ、市内は湊町として発展してきた。新潟各地から集められた米やその他の農作物は市内や全国各地へ運ばれて行った。また、新潟の農作物が集められるばかりでなく、県外の様々なものや人も集ってきた。
このようにかつての新潟は、信濃川からの恩恵を受け農業が発展し、その信濃川を利用して農作物が運ばれ、信濃川の河口部分に集められて栄えて行った。すなわち、新潟市は信濃川という軸上の様々な繋がり（湊町と農村の繋がり、他地域との繋がり、水運による交通の繋がり、人々の繋がり等）を通して形成されて行った。

問題意識
湊町・農業の衰退と失われた繋がり



かつての輸送の中心が信濃川を介した水運であった新潟湊では、川沿いには回船問屋や宿屋・運ばれてきたものを売る卸売や小売りが軒を連ねていた。しかし、近代化の過程において、輸送の中心は車に代わり、堀や川沿いの埋め立てによりまちは河から完全に乖離する事になってしまった。また、全国を代表する農業地域の新潟であるが、現在農村の少子高齢化や後継者不足により農業の衰退が懸念されている。四半世紀の間に、農家戸数は半分近くに減少し、従事者の 80% が高齢者となっている。そのことにより、かつて農地として使われていた土地が後継者不足や廃業により土地が宅地として売り払われ、そこに住宅が建てられる。それと同時に郊外部への道路整備と車社会化が進行し、市街地がスプロール化していった。
近代化の過程においてかつての湊町が持って繋がりは失われ、市街地と農業の衰退は相関関係を持った上で同時進行してきている。

新潟の目指す姿
「農縁」を取り戻す

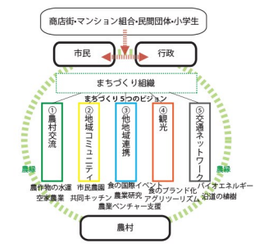


少子高齢化の進行により成長を前提とした社会構造に限界が訪れ、資本主義や合理主義のもと進められた「量」の時代から、歴史や文化・自然・コミュニティなどの価値が求められる「質」の時代へと変化して来ている。かつての新潟には、様々な繋がりがあった。湊町と農村の繋がり・他地域との繋がり・地域内の人々の繋がり・信濃川や堀を利用した水運の繋がり。日本一の農業王国である新潟において、それらの繋がりの根源は『農』にあり、それらは信濃川などの河により醸成されてきた。かつての新潟にあった農を介しての豊かな『縁』を取り戻し、またこれからの社会に向けて新たな「縁」を構築していくことにより、魅力あるコンパクトな市街地の創造のみならず、市街地周辺や信濃川により繋がる農村の活性化を目指す。

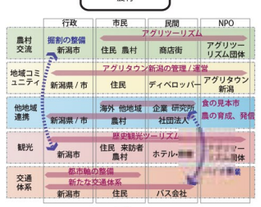
■まちづくり事業スキーム

「農」を活かしたまちづくり

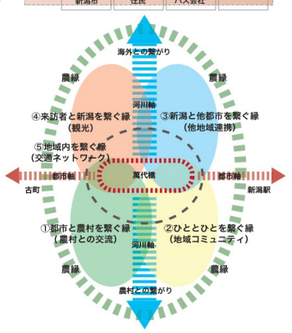
まちづくりビジョンの全体体系図



まちづくりの主体と各地区での取り組み

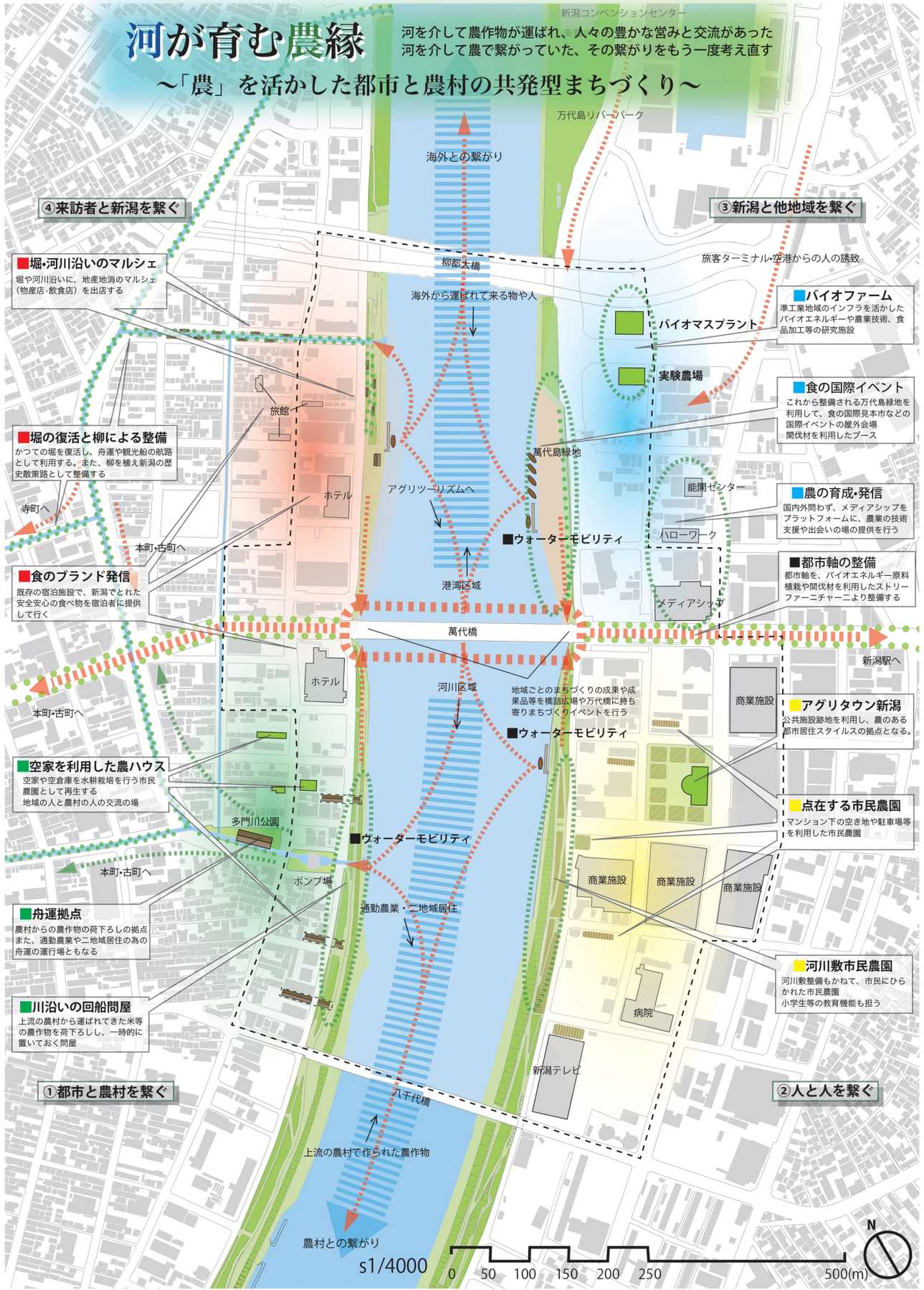


全体コンセプトダイアグラム



新潟県は主食である米の日本一の産地であり、また新潟市の食料自給率は 63% を越え、政令指定都市の中でもずば抜けた数値である。すなわち、「農」は新潟にとって最も誇れる資源であり、「農」という視点から見ると新潟は自立型都市としてのポテンシャルを高く有すると考えられる。また、現在農の生産としての機能のみならず、自然体験や学習・自然景観・コミュニティ・バイオマス等様々な面からの価値の見直しが行われている。
よって、「農」を新潟におけるまちづくりの資源と位置づけ、「農」を通じた様々な繋がりを構築して行く事で、新潟ならではの豊かなまちづくりが行っていけるのではないであろうか。
まず、地域内ポテンシャルを活かした緩やかな４つのゾーニングにより、農を介した繋がり構築を構築していく。まちづくりのヴィションをそれぞれの地区が担って行きそれが地域全体へ波及していく。各地区では、市民や行政のみならず商店街や教育機関等、そして農村が関わり合い、それぞれのまちづくりビジョン実行に向けて組織体系をつくる。

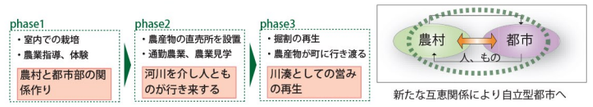
地域ごとの特徴やそのポテンシャル、今後のビジョンは４つのおおまかなゾーニングに分けられる。
信濃川での水運によってつながる（①都市と農村を繋ぐ縁）
農を介して様々な人のつながりを作りだす（②ひととひとを繋ぐ縁）
新潟と他都市が農を介してつながる（③新潟と他都市を繋ぐ縁）
新潟を訪れるひとが農によって新潟とつながる（④来訪者と新潟を繋ぐ縁）
この各地域でのまちづくりビジョンとそれらを結びつける新たな交通体系によって、都市と農が相互依存関係を新たに構築し、持続可能な共発型まちづくりへとつながっていく。



■5 つの『縁』の提案（４つのゾーニングとそれらを繋ぐ交通体系）

■ ①都市と農村を繋ぐ縁 (農村との交流)

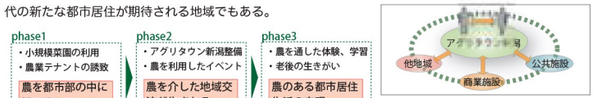
かつて都市部と農村は信濃川で繋がり、人や農作物・生活品の行き来が盛んでお互い相互依存の関係にあったが、その関係性は近代化を経て生産と消費の一方的な関係へと変化し、現在都市と農村の同時衰退が叫ばれている。しかし現在、エコロジーやスローライフ・自然景観など農村の持つ価値が見直されてきている。
左岸南部にはかつては、回船問屋や小売り等が立ち並び農村からの農作物が信濃川や堀を通して運び込まれていた。地産池消を通した自給率の向上による自立型都市の創造、アグリツーリズムによる農業の活性化とPR など、かつての信濃川を通してのものや人の行き来により、都市と農村の関係を再構築する。



新たな互恵関係により自立型都市へ

■ ②ひととひとを繋ぐ縁（地域コミュニティ）

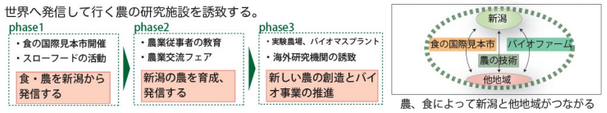
かつての湊町新潟においては、様々な営みの中に人々の生活と人と人の繋がりがあった。職住近接を基本とし、人々の生活は地域とともにあった。しかし現在、少子高齢化により高齢者の単身世代や農業をリタイヤした都心移住者、マンションから通勤する若年世代等地域のコミュニティの中から孤立してしまうような人々の増加が予想されている。また、河川沿いの地域にもかかわらず緑被率の低い地域でもある。
右岸南部は、川沿いに多くの高層マンションが立地し周辺には大型商業施設が建っている。通勤者や若者世代の新たな都市居住が期待される地域でもある。



農を通した人と人とのつながりを生み出す

■ ③新潟と他都市を繋ぐ縁（他地域連携）

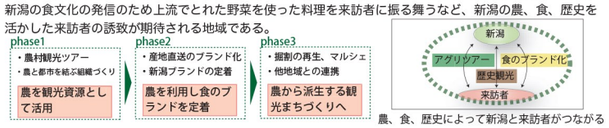
かつて新潟は、日本各地のみならず東アジアとの交易を通して湊町として発展してきた。かつての日本海側の交易の中心を担っていた湊町としての機能は衰退してきてはいるが、「環日本海構想」などに見られるように今後も東アジアと日本を結ぶ拠点として機能していくと考えられる。また、広大な流域圏を持つ信濃川や日本海に開けた港、空港や鉄道などの他地域との繋がりを確保するインフラも多く有している。
右岸北部は、準工業地域に指定され社会インフラが整っており、また港湾地域として日本海に開かれた地域である。よってこの地域を、他地域連携のビジョンを担う地域として位置づけ、農を通した国際交流活動や世界へ発信して行く農の研究施設を誘致する。



農、食によって新潟と他地域がつながる

■ ④来訪者と新潟を繋ぐ縁（観光）

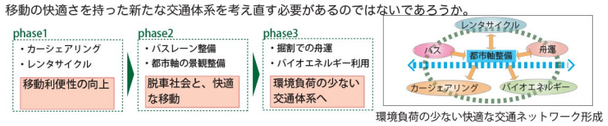
新潟には、誇るべき農の技術や食の文化・湊町の歴史など様々な観光資源がある。かつては信濃川上流や新潟港からの米が水運を使って運び込まれ、蔵や卸問屋等が立ち並んでいた。そのような湊町としての歴史も持っていながら、背後には寺町が存在していて、現在でもそれらの持つ歴史的な雰囲気を感じることができる。
左岸北部には、旅館やホテルが点在していて来訪者の誘致が期待される地域である。この地域を、来訪者にとっての新潟観光の入り口として位置づけ、新潟の歴史に触れながらツアーの一環として農業体験を行ったり、新潟の食文化の発信のため上流でとれた野菜を使った料理を来訪者に振る舞うなど、新潟の農、食、歴史を活かした来訪者の誘致が期待される地域である。

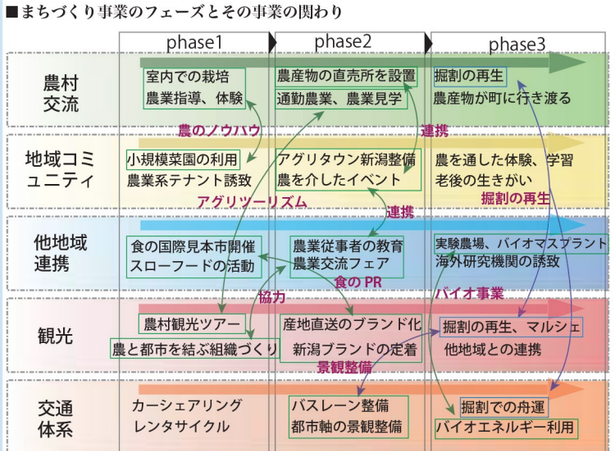


農、食、歴史によって新潟と来訪者がつながる

■ ⑤地域内を繋ぐ縁（交通ネットワーク）

かつての新潟の交通の中心は、舟運であった。信濃川を通して上流部から農作物が運ばれ、日本海から全国や東アジアへものが運ばれて行った。また、市内には堀や用水路がはりめぐらされ、内陸まで舟で直接ものや人が運び込まれていた。しかし、近代化の過程において交通機能の中心は水運から陸運へと移転して行った。
現在新潟の交通機能は、公共交通が多く整備されているものの多くの部分を自動車に依存しているのが現状である。しかしこれからの時代、環境負荷や渋滞問題・高齢者の移動手段などを考えると、利便性のみならず移動の快適さを持った新たな交通体系を考え直す必要があるのではないであろうか。



環境負荷の少ない快適な交通ネットワーク形成

■まちづくり事業のフェーズとその事業の関わり